

私が美川健司という人間に最初に抱いた印象はいけ好かない男というものだった。

新卒で大手と言われる企業に就職の決まった私は、自分の実力に自信があった。学業だけでなく、サークル活動やボランティア活動にも力を入れて、成績はいつもトップクラスだったし、人付き合いも上手い方だと思っていた。だから入社してすぐ、社内でも出世できるように努力した。会社で成果を上げると女だからとか、媚売りだなんだと言ってくる連中もいたけれど、それでも歯を食いしばって頑張った。そんな評価を下してくる人たちを実力で見返してやろうと思ったからだ。

けれど、上司である美川健司という男がそれを阻害した。

彼が悪いわけじゃない。ただただ彼が優秀だっただけだ。仕事ができ、部下にも慕われていて、人望があつて、おまけに顔も良いときたものだから女子社員からは絶大な人気を誇っていた。私がどんなに成果を上げようと、美川さんの方がもっと大きい成果を上げてしまうので、私の存在は霞んでしまうのだ。それが悔しくてたまらなかった。

「かんばしい！お疲れ様です！」

今日は同じ部署の人たちと飲み会を開いていた。居酒屋の一室で、皆が思い思いに注文をした料理に手を付けていく。もちろん私も例外ではなく、生ビールをあおっていた。今回飲み会が開かれた理由が、美川さんが大きなプロジェクトを成功させたからなので、彼の周りだけ異様に盛り上がっていた。隅の席でその光景を眺めるだけの私は、内心舌打ちをしながら焼き鳥を口に放り込む。そんな私の様子を見てか、隣に座っている同期が声をかけてきた。

「ねえ、沙樹ちゃん。最近元気ないけど何かあった？」

「え？そうかなあ」

私は咄嗟に取り繕うように笑ってみせた。

美川さんに仕事で負けて嫌っているなんて知られてしまっただけは、今まで築いてきたできる女性の私のイメージが壊れてしまう。それだけは何としても避けたかった。彼女は、さほど興味がなかったのか「ふーん」と気のない返事をした。

「それにしても美川さんって本当にすごいよね。顔もいいし、出世頭だし、完璧って感じ」

「……そうだね」

彼女の視線の先を追う。そこには美川さんの笑顔がある。それを見た瞬間、胸の奥底にあるドロリとした感情が溢れ出してきたような気がし

た。

——ああ、気に入らない。

彼は何も悪くはない。だからこそ、こんな黒い気持ちを抱いてしまう自分が余計醜く思えた。そんな心中から目を背けるようにジョッキを二気に空にする。そして再び店員を呼びつけ追加の注文をする。同期がまたもや心配そうな顔を向けてきたが、「大丈夫だよ」と軽くあしらった。

心地のいい揺れの中に、ウッディーノートの落ち着いた香りが鼻をかすめる。私は重い瞼を開けると、そこがタクシーの中であることに気づいた。

先ほどまで皆で飲んでいたはずだが、途中からの記憶が無い。ぼんやりと窓の外を流れていく景色を眺めていると、隣から「起きたか？」と声をかけられた。そちらへ目を向けると、そこには美川さんがいた。

「美川さん……？なんで……」

「飲み過ぎて潰れてたんだよ。まったく、こんなになるまで飲むな」

「……すみません」

美川さんに迷惑をかけてしまった。そのことが悔しくて、私は膝の上に置いた拳をギュッと握った。そこからは会話はなく、お互い窓の外を流れる景色に目を向けていた。段々と見慣れた街の風景になってきた。そこでふと疑問に思う。

「美川さん、私の家知ってましたっけ」

「……高橋の同期のやつに教えてもらったよ」

「そうでしたか。なんかすみません」

「謝らなくていいから、もうちょっと休んでろ」

「……ありがとうございます」

そうは言われても、酔い潰れた醜態を晒してしまっただけでは休むに休めなかった。チラリと横目で美川さんを見る。彼はまた向こうの窓の方に視線を戻していた。

ああ、本当にいけ好かない人だ。私はあなたを見るたびに、醜い感情が心の中で大きくなっていくのに。あなたは私のことを歯牙にもかけない。

また、醜い感情が胸の中に溢れてきて鼻の奥がツンとした。

(……今日はなんか駄目そう)

アルコールのせいか、感情の起伏が大きくなっている気がする。このままだと、何か余計なことを言ってしまうそうだ。それは避けたかったので、私は目をきつく瞑って黙り込むことにした。

「おい、着いたぞ」

しばらくしてから美川さんにその声をかけられる。どうやら、私のアパートに到着したようだった。美川さんがタクシーから降りて、スペースを空けて私に降りるように促す。それに従い私もタクシーから降りようと席を立とうとしたのだが、思った以上に足元がおぼつかなくてふらついてしまった。そんな私を美川さんが支えるように抱きかかえる。

「おい、大丈夫か？」

彼はそう言って私を覗き込んできた。

私は頷くとどうにか自分の足で立ちアパートの自室へ向かおうとするが、上手く足に力が入らずまたもよろけてしまう。そんな私の様子を見かねて、美川さんが肩を貸してくれた。

「すみません……」

「気にしないでいい」

アパートの階段を上がり、自分の部屋の前に立つ。美川さんが「鍵は？」と聞いてきた。私はバッグから鍵を取り出すと、鍵穴に差し込もうとする。しかし、手元がおぼつかず中々鍵が挿さらない。

「はあ……」

小さくため息をつく、美川さんは私の代わりに鍵穴に鍵を挿してくれた。そのままドアを開けると、私が転ばないようにゆっくりと部屋に引き入れる。

「とりあえずそこに座れ」

そう言って、彼は私をソファの上に座らせた。私は背もたれに体を預け、天井を仰いだ。

頭がぼんやりする。

蛍光灯の光がまぶしくて目を細める。

視界の端で美川さんがコンビニの袋から水の入ったペットボトルを取り出すのが見えた。彼はそれを私に手渡した。

私はペットボトルの蓋を開ける気力もなく、ただ手の中にあるそれを眺めていた。

「おい、本当に大丈夫か？」

美川さんの声がすぐそばで聞こえる。顔を上げると、美川さんが心配そうにこちらを見ていた。

彼の垂麻色の瞳の中に、私が映っている。その事実がどうしようもなく気分を高揚させた。アルコールで茹った頭で考える。

(……この人を動揺させたい)

私だけ振り回されるのは癪だった。彼が私のせいで慌てふためく姿を見たい。そして、もっと私に夢中になってほしい。そんな欲望が心の中に沸き上がってきたのだ。

私は、おもむろに彼のネクタイをグイッと引っ張った。

「っおい、何をするんだ」

突然のことに驚いたのか、彼は少し声を荒げる。けれど、私はそれを無視して首筋に顔をうずめた。彼の匂いが鼻孔をくすぐる。香水だろう

か、ほのかに白檀の香りがする。その匂いを胸いっぱい吸い込んだ。

「……いい匂い」

耳元でそう囁くと、美川さんの体が硬直するのが分かった。彼の喉がゴクリと上下する。それを見てクスリと笑いが漏れた。いつも余裕そう
な表情を浮かべる美川さんが、今は動揺して狼狽している。そのことがとても愉快だった。

私はさらに体を密着させると、彼の腰に手を回した。彼の体温と鼓動が伝わってくる。美川さんの身体がわずかに震えた。

「っ、いい加減に」

美川さんはそう言って私の肩を掴み、引き剥がそうとする。けれど私はそれを拒むように彼にぎゅっと抱き着いた。

「いやです」

「、高橋」

「や」

駄々をこねる子どものように、私は首を横に振る。

困らせない。今、彼の頭の中を私でいっぱい満たしてやりたい。その欲求が心の中を満たしていた。

私はゆっくりと顔を上げて、美川さんの顔を見上げる。彼は困惑したような表情を浮かべていた。いつも余裕そうに細められている瞳が揺れている。その表情は初めて見るもので、私は嬉しくなった。もっと見たいと思った私は、さらに顔を近づけていくと彼の唇に触れるだけの口づけをした。

「っ！」

美川さんは息を吞んで目を見開いた。その表情を見て自然と笑みがこぼれる。

「ふふ」

普段自分が翻弄されるばかりで、美川さんを翻弄できたのはこれが初めてかもしれない。そう思うととても気分が良かった。

すると、美川さんが何かに耐えるように唇を噛みしめた。私は首を傾げる。彼は目を閉じて何かを迷っているようだったが、すぐに再び開いた目は情欲に濡れていた。

「後悔しても知らないからな」

美川さんはそう言って、私の後頭部に手を回し噛みつくようなキスをした。口内に侵入してくる舌の感触に背筋がゾクゾクとする。私は彼にしがみつこうようにして自らも舌を絡めた。お互いの唾液が混ざり合う音が耳に響く。

長いキスの後、美川さんが唇を離すと銀色の糸が引いた。彼は私を抱き寄せると、そのままソファに押し倒すように横になった。そして再び深い口づけをする。彼の舌が口内を蹂躪していく感覚がたまらなく気持ちいい。

「ん、ちゅっ……はぁ……」

アルコールの匂いに混じって白檀の香りがする。頭がクラクラした。私は美川さんの首に腕を回して抱きついた。もっこの香りに包まれた
いと思ったからだ。

「はっ……」

唇が離れる。互いの唾液がいやらしく糸を引いた。彼は自身のネクタイを煩わしそうに外し、シャツのボタンを上から二つ外す。その仕草に
ドキドキして胸が高鳴った。

彼が再び顔を近づけてくる。私は目を閉じてそれを受け入れた。美川さんの舌が私の歯列をなぞるようにして動き回る。それに応えるように
私も彼の舌に自分のものを絡めた。

美川さんはキスをしながら、器用に私のブラウスのボタンを外していった。そして下着を上にならずと、露わになった胸に手を這わせる。そ
の手つきは壊れ物を扱うように優しかったが、それでも刺激が強かったようで私は小さく声を漏らした。